

はたはったん



コシヒカリ はたはったん

育種目標

1. 少肥でも肥沃な条件でも適応し、収量性が高く、高品質で、良食味
2. 草型は中間型～穂重型で、コシヒカリ並みの早晩性(コシヒカリ(長野県松本市、標高650-700m)を対照)
上記の目標にかなう、自然交雑した自生株から穂が大きく、草丈の高い系統を無肥料栽培条件で選抜しました。

「はたはったん」の特徴

少肥で収量性が高い。コシヒカリに比べ出穂がやや遅い。稈がやや長く、籾数の多い偏穂重型で、玄米はやや小粒です。食味が良く、甘味があり粘りが少ないすっきりした味わいです。

コシヒカリの早晩性が「早の晩」～「中の中」に分類される地域に適した品種です。コシヒカリが栽培できない寒冷地や、暖地の普通期栽培には適していません。

● 育成地での特徴(コシヒカリとの比較)

- ・早晩生: 中の晩(出穂期が3～4日遅い)
- ・草型: 偏穂重型(分けつは80～90%、1穂籾数は120～130%)
- ・品質: コシヒカリと同等の良食味(NIRSの評点で105%)
- ・耐倒伏性: 高い
- ・千粒重: やや低い(96%)

「はたはったん」栽培のコツ

目標: 穂数を m^2 あたり300本程度、総籾数は3万粒程度とする。土づくりと基本技術を励行し、雑草害が低減される栽培を目指す。やや小粒のため、総籾数を適正にし、十分に登熟させる。

土づくり: 秋に稲わらを還元し、非栽培期間は排水を徹底する。

田植え時期: 地域慣行(平均気温 $13-15^{\circ}C$)より暖かい時期($18-20^{\circ}C$)とする。

栽植密度: 圃場の肥沃度に応じて調整する。育成地(長野県松本市)では、坪当たり60-80株、株あたりの苗本数は3-4本に調整。

施肥: 圃場の肥沃度に応じ、基肥量を調整すること。田植え後の施肥が望ましい。入水前に施用する場合は、水稲初期生育を阻害しないよう留意すること。

※採種する場合、異株を確実に抜き取り、特性を維持するため200～500株程度の集団から採種します。病虫害の少ない所から刈り取り、ていねいに脱粒してください。

※登録品種のため、採種種子の自家利用外の頒布・転売には、新たな契約とそのための申請が必要となりますのでご注意ください。

育成地(長野県松本市)での具体的データ

品種特性

		移植期	出穂期	成熟期	稈長	穂長	精玄米重	穂数	一穂粒数	登熟歩合	千粒重
		月/日	月/日	月/日	cm	cm	kg/10a	/m ²	/穂	%	g/1000粒
少肥	はたはったん	5/22	8/14	10/5	72.5	18.3	488	273	107	91.9	19.7
	コシヒカリ	5/22	8/9	9/21	69.8	17.8	483	315	80	94.7	20.8
	キヌヒカリ	5/25	8/10	9/24	62.0	16.0	468	291	76	94.4	21.4
標準肥	はたはったん	5/22	8/10	10/2	73.1	17.9	559	301	104	94.4	19.9
	コシヒカリ	5/22	8/7	9/21	70.9	17.8	551	333	77	97.0	21.0
	キヌヒカリ	5/25	8/8	9/24	63.4	16.4	570	354	81	94.9	21.7

共通管理: 11月秋耕、4月春耕、4月中旬播種、5月下旬中苗移植(2006~2008年)

少肥 : 米ぬか主体の有機物、窒素換算で10a当たり2.5kgを移植後に田面施用

標準肥: 米ぬか主体の有機物、窒素換算で10a当たり合計10kgを非栽培期間と、移植後田面に分施

栽植密度

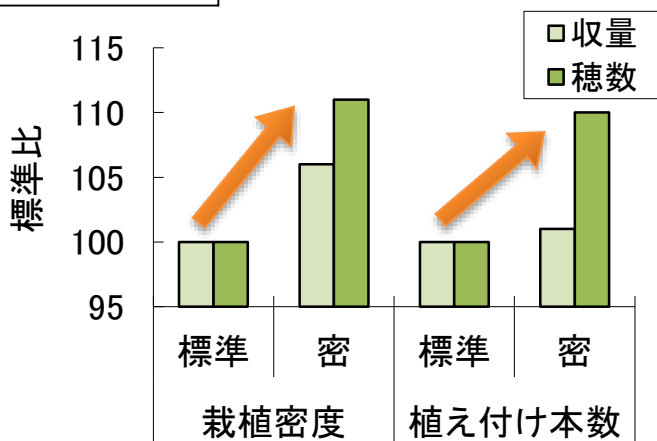


図 栽植密度と植え付け本数による収量及び穂数の増加率(2010-2012年)

*栽植密度の標準は坪当たり50-60株、密は70-80株、植え付け本数の標準は株あたり3.6本、密は4.6株を表す

施肥量

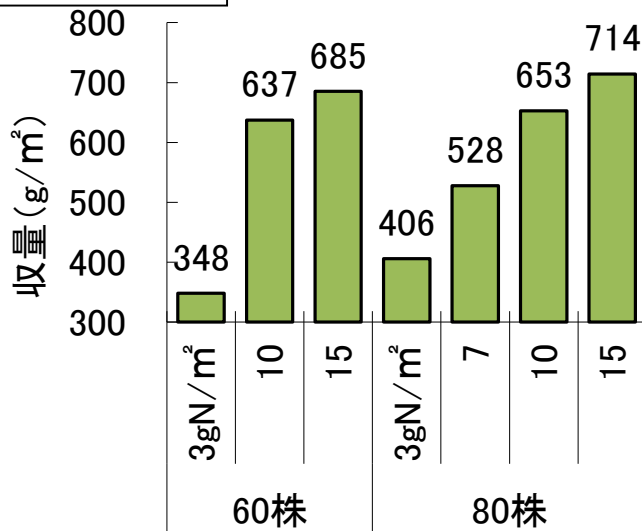


図 栽植密度と施肥窒素量を異にする「はたはったん」の収量(2010年)

品質

表 「はたはったん」と「コシヒカリ」の品質比較

	Nirsによる旨み値(±0が基準)			
	2010年	2011年	2012年	平均
はたはったん	1.18	1.35	1.44	1.32
コシヒカリ	1.09	1.30	1.21	1.20

※旨み値は近赤外分光計(Nirs-6500)により測定し、滋賀県産「日本晴れ」が基準値となる

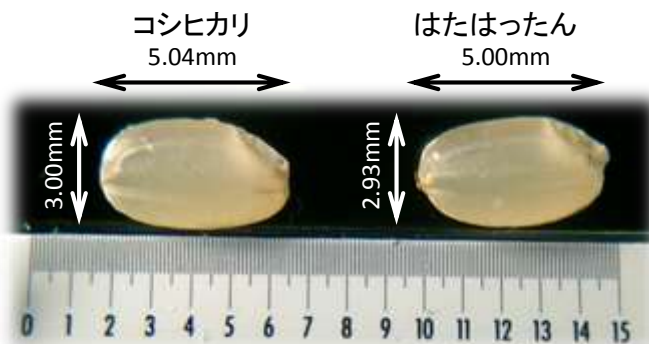


図 「はたはったん」と「コシヒカリ」の粒長、粒幅